

報道関係各位

ノバルティス ファーマ株式会社

ノバルティス ファーマ（株）筑波研究所 開所10周年を記念して「オープン・ラボ」を開催

ノバルティス ファーマ株式会社（代表取締役社長：通筋雅弘）の筑波研究所（つくば市大久保）は本日、開所10周年を記念して、「オープン・ラボ」を開催しました。地域の高校生・大学生や研究所で働く社員の家族を招待し、地域社会への感謝を表すとともに、筑波研究所での仕事内容などを紹介し、研究開発活動について理解を深めていただくことを目的としたイベントです。

高校生（土浦一高、つくば秀英高校、竹園高校）78人、大学生（筑波大学）5人、社員家族55人を含む約150人が来場し、研究所員も合わせると参加者数は総勢約300人となりました。

今回のオープン・ラボでは、慢性骨髄性白血病治療薬「グリベック」を題材にした“薬ができるまで”のプレゼンテーションや、創薬から前臨床開発のステップに沿って研究所内を見学する“ラボツアー”などが行われ、参加者は最先端の医薬品研究開発活動にふれました。また、ロビーでは、ノバルティス ファーマ（株）が1994年から活動をサポートしている日本移植者協議会による「Gift of Life - 移植を受けた子供たちの作品展 - 」を開催したほか、夕刻にはバーベキューを行い、参加者が親交を深めました。

研究本部長のロバート・ホフは、世界のノバルティスの研究活動について紹介するとともに、「優れた研究者は好奇心が強く、遊び心をもって、誰も知らない『新しいもの』を知ることが大切です」と、将来をになう高校生や大学生に研究の面白さを熱心に語りました。また、代表取締役社長の通筋雅弘は、「患者さんに貢献する画期的新薬の創製を支えているのは研究所です。これからも地域の皆様のご支援のもとがんばっていききたい」と、地域社会の皆様の日頃のサポートと理解に対し、感謝の意を表しました。

ノバルティス ファーマ（株）では、こうした地域活動が企業と地域社会のよりよい共存と相互理解の促進につながればと考えています。また、このオープン・ラボにより、参加した学生の皆様の医学・薬学分野への興味が深まり、将来の進路を考える一助となればと願っています。

筑波研究所は、1993年に当時のサンド薬品の筑波総合研究所として設立されました。その後、1996年のスイスのチバとサンドの合併を経て、現在はノバルティス ファーマのグローバル研究拠点の一つとして、循環器疾患領域を中心とした新薬の創薬研究および前臨床開発を行っています。